

■ エッセイ

ESSAY

第2回

ある地域人の生活観察 「地域のライフプラン」の話

● Text : kana yamagishi

山岸 加奈

フリーライター

私を含めて30代半ばにさしかかった方には、会社勤めの人、自ら起業した人、扶養家族に入っている人、一人暮らしの人、両親と同居されている人など、いろいろな生き方があり、考え方も千差万別であるかと思います。この年代は、これまでにやってきたことを自問し、これからのライフスタイルを具体的にイメージし、その実現に向けてどのように生きていこうかと考える機会が多いのではないのでしょうか。

その際、私たちの将来の生活を、国・地方行政・企業がどの程度支えてくれるのか、30年後の医療、介護、年金などはどのような状況なのか、誰が何を保障してくれる社会になっているのでしょうか。前向きな考え方をすると、自分たちのライフプランは、そのすべてを他人の信頼に委ねるだけではなく、自ら物事や品質を見定める尺度（判断力・価値観・優先順位など）で描いていく必要があるに違いありません。

今回の記事では、生活者“生産者”と生活者“消費者”による地域の魅力を活かした取り組みが生み出す魅力的なコミュニケーションから、地域のライフプランのヒントを私なりに考えてみます。

新鮮な牡蠣を生産する責任

去年の暮れのこと。地元ニュースで、牡蠣^{かき}の不漁が報じられました。海水温度が下がらない異常気象により、福岡県沖にある牡蠣の身がきちんと育たない状況でした。

仮設ビニールハウスの牡蠣小屋（福岡県糸島郡）のおじさんいわく、「設置が完成し、オープン予定だったんですが、延期することになりました。残念ながら、身がしっかりした美味しい牡蠣が、消費者に提供できないからです」とのことでした。

2月には海水温度も下がり、福岡市漁業協同組合の牡蠣生産者から「今までより小振りですが、美味しい牡蠣が育ちました!」と報じられました。販売数こそ減ったようですが、後で知った情報では、1口3,500円の牡蠣オーナー制度を企画しており、消費者に牡蠣の配当義務があったようです。

これらの報道を通して、この牡蠣生産者が、「小売業者を通さずに消費者に直接新鮮な牡蠣を提供する」ことに責任を守る姿を感じました。



5月18日の大豆畑トラスト交流会：11月に種をまいた赤いそら豆の収穫

消費者が委託する大豆畑トラスト

九州の農家は、多種多様な野菜や果物の品種を年中生産しています。しかし、大豆が生産されていることはあまり知られておらず、北海道十勝産のトップブランド大豆とは大違いの状況です。また、福岡のみそは、甘めのあわせみそが多く、麦や米を原料にされています。また、刺身しょうゆは、砂糖が入っているような甘辛いものが定番です。初めは、刺身に付けたしょうゆが甘すぎて、刺身を食べている気がしませんでした。

福岡の甘いみそに慣れたころ、4月の地元新聞に、みのう農民組合（福岡県うきは市）による「大豆畑トラスト」参加者募集の記事が掲載されていました。

消費者が農家に非遺伝子組み換え大豆（品種：ふくゆたか）の栽培を委託し、取れた分の大豆を配当として受け取るという内容。

その参加方法は、一口（33平方メートル）4,000円で、何口でも応募できます。消費者である参加者は、種まき、そら豆・枝豆・大豆等の収穫、みそ加工の作業などが体験でき、収穫した大豆・加工したみそやしょうゆを配当として受け取ることができるそうです。

私は早速主催者である現地の生産者の方に連絡し、5月以降開催される農作業とみそ加工に参加することにしました。この大豆畑トラストは、11年目を迎え、約2,000名の方と対話をすることができ、最近では150名近くの方が農作業に参加しているとのこと。現地の生産者の方々は、参加する消費者の顔を覚えたい、対話をしたいという意思を持っていること、末長い付き合いの心がけを持っていることに、私は生産者の温かさを感じています。

この大豆畑トラストを通して、地域財源に投資する

という利害関係だけでなく、①個人投資家でもある消費者が投資する土地へ出向くこと、②現地で消費者と生産者との交流関係が生まれていくこと、③消費者が質の高い生産・加工品を理解し、生産者がある理解に応えること等が重要であると考えられます。

北海道のライフプランを考えると

これら2つの事例のように、消費者が生産を委託するファンドづくりそのものが、その地域のライフプランや資産運用の要になるとは言い切れません。また、国の政策・助成支援や市町村の計画に自分たちの地域のライフプランを委ねきってしまうことには大きなリスクがあるように思えます。大切なことは、地域ごとの尺度で、財源確保につながるものを見いだし、地域独自の運用を心がける、すなわちライフプランを描くことにあるかと思われます。

また、7月の北海道洞爺湖サミットの開催に向けて、道民の方々の環境問題への関心が高まっているころかと思います。北海道は、豊かな自然や景観を潜在的に持ち備えています。これまでも国・道・地域・市民のそれぞれのレベルで、官民協働による環境への取り組みを行ってきたかと思います。

一方で、そもそも環境の取組みは生活活動の延長にあるはずで、北海道でも、生活者“消費者”と生活者“生産者”の両者が顔を合わせる機会が増えることが大切かと思えます。適度な緊張感を持つ付き合いを続けること、このような人と人をつなげる取り組みやしくみが、地域レベルのアクションのひとつとして、定着していく中で、環境問題は身近なものとなるのではないのでしょうか。

● Profile

山岸 加奈 やまぎし かな

札幌生まれ、福岡在住。フリーライター。
イタリア国立フェラーラ大学建築学部留学、北海学園大学非常勤講師、北海道景観審議委員、北海道大学博士後期課程満期退学。仕事のために生きるのではなく、おいしい食べ物や飲み物をいただくこと、いろんな人との対話をもち、豊かな生活を送ることが大事であるという信念を持つ。